

二〇二二年一月一六日(参加者一四名)

溪流の漣へ且つ散る紅葉かな	うつき
人去ればにわか寂し冬桜	うつき
猪垣の扉は摩訶ふしぎ押せば開く	うつき
大方は檻褸引つさげて枯蓮	うつき
この径や石路街道と言ひつべし	うつき
冬麗や水陽炎が幹のぼる	うつき
石路黄なり那智黒の径綴りけり	ほんこ
一陣の風に攫はれ庭紅葉	ほんこ
お茶室の座に照り映ゆる庭紅葉	ほんこ
濁り池骸さながら蓮枯るる	ほんこ
磊々に高鳴る水音溪紅葉	ほんこ
小春日にしぶき飛ばして作り滝	明日香
石路あかり溪へと下りる階に	明日香
沢小春水かげろふの楽しげに	明日香
首ふりて風にあらがふ枯蓮	明日香
山莊を埋めて四圍の紅葉山	あひる
石路の黄を辿りて園の七曲り	あひる
石路の黄に寄り添はれをる天使像	あひる
ぬた場またぬた場や小春日の山路	あひる
スマホ手に凶鑑代りや園小春	たか子

クラス会さながら吟行冬温し	たか子
寒晴や庭滝の音間断と	たか子
枯沼にうごめく命愛でにけり	たか子
冬菜畑日ごとに緑ふくらませ	はく子
銚立つるメタセコイアの冬木立	はく子
ふらここに座す偕老の二人かな	はく子
ぬきん出て光を集む金鈴子	小袖
錠固く庵を閉ざして冬ざるる	小袖
溪の秋木々に映りし水陽炎	ふさこ
秋草の名をあてあひて吟行す	ふさこ
谷底に届く日のあり石路黄なり	せいじ
園児らのお弁当タイム冬桜	こすもす
枯葉一つ迷惑さうや蜘蛛の糸	豊実
蘭亭の簷牙に触れて一葉落つ	よう子
落葉踏む火垂るの墓の謂れの碑	凡士
慰霊碑に彼の名探す冬日向	凡士
濃き紅葉拾ひサラダにトッピング	なおこ
日向ぼこしつっぺちやくちや句輩	なおこ

定例句会みの選

二〇二二年一月一六日(参加者一四名)